

序

著者	埴原 和郎
雑誌名	JAPANESE AS A MEMBER OF THE ASIAN AND PACIFIC POPULATIONS
巻	4
ページ	vii-ix
発行年	1992-12-25
その他のタイトル	Preface
URL	http://doi.org/10.15055/00003272

序

「アジア・太平洋諸民族の一員としての日本人」と題する国際シンポジウムは1990（平成2）年9月25-29日の5日間にわたって京都・新都ホテルで開催された。これは国際日本文化研究センターの主催によるもので、日本、カナダ、中国、アメリカ合衆国から自然人類学、人類遺伝学、家畜遺伝学、および先史考古学などの専門家が出席した。

このシンポジウムは、日文研がすでに行った国際研究集会とは2つの点で異なるものであった。第1は、英語を公用語にしたことである。日文研は1987年に創設されて以来、「世界の中の日本」という共通課題のもとに3回の国際研究集会を開催した。これらの集会に参加した研究者は大部分が人文・社会科学を専門とし、きわめて高度な日本語能力をもっていたために日本語が公用語として使われた。しかし自然科学者の世界は別である。彼らは世界共通の術語、方法論ならびにデータを用いることから、日本語よりは英語の方が有効である。また日文研は国際性を重視していることから、英語を公用語とする会議の運営に慣れる必要もある。

第2は、今回のシンポジウムが現在進行中の共同研究「日本文化の基本構造とその自然的背景」の一環として企画されたことである。日文研のルールでは、各教授は学際的共同研究と、それに関連する国際研究集会をオーガナイズすることになっている。しかし「世界の中の日本」は特定の共同研究とは関係なく、日本文化の一般的問題を広く討議するものであった。それは当時、いずれの共同研究も発足直後であったからである。したがって今回のシンポジウムは、日文研のルールに従って開催された最初のケースということになる。

シンポジウムの目的は、日本人集団の起源および他集団との類縁性を、アジア・太平洋圏を含む広い視野から討議することである。参加者はそれぞれ専門分野を異にするものの、この地域の集団および文化に関して十分の研究実績をもっている。したがって討論は個々の事実に関するのではなく、日本人集団と日本文化の形成に関与する基本的要素の分析に集中された。

会議は次の4部から構成された。(1)骨形態学、(2)歯人類学、(3)人類遺伝学および動物遺伝学、(4)先史考古学。座長は6名の参加者が交代で務め、また日文研の助教授諸氏には副座長として会議の進行を補助して頂いた。

最終日の9月29日（土）には都ホテルで公開講演会が開催された。約500名の来会者は、梅原猛所長の挨拶に続く3題の講演を熱心に聴講した。講演者と題名は次のとおりである。

C. G. ターナー（アリゾナ州立大学）：歯からみた日本人の起源（同時通訳つき）。

小山修三（国立民族学博物館）：縄文から弥生へー民族考古学の立場から。

埴原和郎（日文研）：日本人の形成。

以下、シンポジウムにおける各参加者の報告を簡単に要約する。

9月25日（火）午後

呉新智：港川人（沖縄出土・後期旧石器時代）の起源は中国北部ではなく中国南部であり、また縄文人は港川人および柳江人（中国南部出土）に似ているがワジャク人（ボルネオ出土）には似ていない。したがって縄文人の祖先は中国南部の古代アジア人の系統と考えられる。

M. Pietrusewsky：アジア、オーストラリア、太平洋の諸集団の頭骨を比較すると、縄文人とアイヌは現代日本人および他の東アジア人とは似ていない。多数の集団の比較によれば、縄文人もポリネシア人も、もともとは東南アジアに起源をもつと考えられる。

山口敏：縄文人の起源は東アジアの南部だが、現代日本人の大部分は、弥生時代以後渡来したアジア大陸起源の集団の子孫であろう。

9月26日（水）午前

N. S. Ossenberg：太平洋、東アジア、ソ連圏に分布する多民族の頭骨における非計測的遺伝形質の出現頻度を比較した結果、アイヌは縄文人を祖先とすること、現代日本人の南西日本から北東日本にかけての勾配はアジア大陸起源の渡来集団の影響であることが明かとなった。またアイヌー関東日本人ー近畿日本人のグループにみられる勾配は、アリュートーアタパスカン・インディアンーエスキモーの勾配とよく似ている。

石田肇・百々幸雄：頭骨の非計測的遺伝形質からみると、現代日本人はアジア内陸部のモンゴロイドに似ている。一方、シベリアのモンゴロイドの中にはアイヌおよび縄文人との類似性を示す集団は見あたらない。

内藤芳篤：九州の弥生人は2系統に分類される。西北九州のグループは縄文人の系統であり、北九州のグループはアジア大陸から渡来した集団の遺伝的影響を受けている。

9月26日（水）午後

C. G. Turner II：太平洋、アジア、ソ連圏各集団の歯の形質を比較した。縄文人・アイヌのグループと弥生以後の日本人とは歯の形質を著しく異にするが、これは日本列島における集団の二重起源を示す。また縄文人・アイヌは17,000年以上前の東南アジア人に起源を求めることができるが、弥生時代以後の日本人は南中国（華南）起源と思われる。

溝口優司：歯の大きさは食物への適応によって変化する。縄文人の歯は採集・狩猟文化に、また現代日本人の歯は農耕文化に適応したものであろう。

埴原恒彦：太平洋、オセアニア、アジアおよび日本の頭骨と歯の形質を比較すると、縄文人、アイヌ、奄美・沖縄の集団は弥生人および現代の本土日本人より東南アジア集団との類縁性が強い。また特異な特徴をもつオーストラリア・アボリジニの歯は、Turner の分類法に従えば 'proto-sundadont'（原スンダ型歯列）と呼んでよいのではないか。

9月27日（木）

尾本恵市：日本、東アジア、フィリピン、オーストラリア各集団の遺伝子頻度の勾配からみると、アイヌの起源はモンゴロイドであること、現代日本人には大陸集団の強い影響があること、アイヌと沖縄（琉球）集団の間には強い類似性があることが分かる。

宝来聡：約6,000年前の縄文人骨に残るミトコンドリア DNA の増幅に成功した。種々の現代人集団の mtDNA と比較した結果、この遺伝子の塩基配列は現代日本人とは一致せず、一部の東南アジア人遺伝子と一致することが判明した。この結果は縄文人の起源について一つの証拠を提供するものであろう。

田名部雄一：日本犬の遺伝子および形態を分析すると、北海道、東北地方の犬は縄文時代の犬を祖先とし、その系統は東南アジアの犬につながる。一方、西日本の日本犬は朝鮮半島に由来するもので、おそらく弥生時代以後に日本にもたらされたと考えられる。

9月28日（金）午前

安志敏：日本の旧石器文化は複数の異なるルートで入ってきた。縄文文化は中国東南部の沿岸文化と関係をもち、弥生文化は華中、つまり揚子江南岸地域の文化に類似する。

小山修三：生態学的アプローチによって先史時代の日本の人口を推定すると、弥生時代に爆発的人口増加が認められる。これは水田耕作技術の導入に伴うものと考えられる。

佐原真：社会階層を伴う古代社会の成立を 'ancientization'（古代化）という言葉で表わすと、この現象はすでに縄文時代にはじまっていたと考えられる。農耕民の特色としての争乱は弥生時代に認められるが、現代日本人には今なお縄文文化の要素が残っている。

9月28日午後

Y. H. Sinoto (篠遠喜彦) : 考古学、言語学、人類学の成果にあってポリネシア人およびミクロネシア人の移動経路を推測した。またニュー・ヘブリデスで発見された土器片が縄文土器に類似することを示し、参加者の注目を集めた。

[筆者注：縄文文化の太平洋地域への影響については、今後詳しい研究を進める必要がある。]

H. Kurashina (倉品博易) : グアム島・タモン湾のゴンガ＝ガン・ビーチ遺跡は現在発掘調査中であるが、きわめて規模の大きい遺跡で、17世紀以前の Latte 文化期に属する。この調査によってグアム島におけるチャモロ族 (ミクロネシア人) の文化、社会、集団の解明が期待される。

B. E. Anderson : 上記の遺跡から150個体に近い人骨が発見された。この集団の一つの特色は、種々の疾病および先天異常の所見が多いことである。

[筆者注：太平洋民族は日本人と同様に古代の東アジア集団の系統に属すると考えられる。したがって日本人の集団形成史を研究するにあたり、太平洋民族を無視するわけにはいかない。]

埴原和郎 : 日本人の起源に関する多くの学説、旧石器時代から現代にいたる種々の自然人類学的データを総合的に分析した結果、日本人集団の「二重構造モデル」に到達した。これは南アジア系と北アジア系の2集団を要素として日本人が成立したというモデルで、研究方法と考え方の細部は異なるものの、ターナーの「日本人二重起源論」と一致する点が多い。

"NICHIBUNKEN NEWSLETTER, No. 8" (1991年1月) の記事の中で、アリゾナ州立大学の C. G. ターナー教授は次のように総括している。

この画期的な国際シンポジウムにおいては、多くの通時的な生物学的ならびに文化的証拠に基づいて次の結論が得られたことを特記すべきであろう。(1) 縄文人は12,000年以上前の南方一おそらく東南アジアの集団に起源をもつ。(2) 弥生時代以後の渡来者はアジア大陸に起源をもち、日本列島の在来集団と種々の割合で混血した。

ターナー教授が指摘するように、このシンポジウムでは互いに方法論を異にする研究が重要な点で一致し、日本人の集団形成史に一つの明確な展望が開かれた。その意味では、このシンポジウムは予期以上の成功をおさめたといえる。同時に、討論を通じて不一致点が浮き彫りにされたこともまた、大きな収穫というべきだろう。なぜなら、それらの点は今後の研究に一つの道を示しているからである。

最後に、貴重な研究成果の報告と実りある討論を行われた参加者に深く感謝したい。また梅原猛所長、公開講演の座長をお願いした伊東俊太郎教授、各セッションの副座長を務めて頂いた日文研の助教授諸氏、組織委員会委員の諸氏、ならびにシンポジウムの準備と運営に多大の努力を惜しまれなかった日文研の職員諸氏に厚くお礼を申し上げる。

この報告書が日本人のみならず、広くアジア・太平洋民族研究のマイルストーンとなることを期待して序に代える。

1991年7月

組織委員長・編集委員長
埴原和郎